

肩を押し買ふべき日記探しけり
門限をせずよくはずむ年忘れ
耳さとき老にまけまじ歌留多会
左義長や北国の日のいま上る
大とんどさながらネロの焚くごとく
ロザリオを繰る胼の手をいたはりぬ
焼却炉火を吐いてをる雪間かな
臣虚子と詠みし筑紫の野を焼ける
民宿の椀の重さよ田螺汁
長旅の第一日目西行忌
舷に立小便や鳥雲に
田楽やいと鄙びたる塗りの箱
黒潮のおもてきらめく椿かな

一女性長き祈りや春の昼
虚子いますごとく貴船の落花かな
思ひ川こゝよと落花たゝみかな
東山西山花の虚子忌かな
公園も湖のうち凧
寺の松賞むる遍路の寄りにけり
人丸忌長押三十六歌仙
天がかかる藤のこぼせし花ならむ
広葉うちさわぎて朴も花開く
提灯に似たりバナナの袋掛け
短夜のダウンタウン街夜を知らず

二〇一八年一〇月二三日